



北海道・彦根經由・江戸 — 全国を行き交う書状 —

電話や電子メールのなかった時代には、書状は人が連絡を取り合うための主な方法であり、多くの書状が人々の間でかわされました。幕末期に全国を股にかけ活躍した商人の書状をとりあげ、江戸時代の書状の様子を見てみましょう。

安政6年（1859）6月1日、彦根藩領の柳川村（現・彦根市柳川町）の商人田村新作が、北海道松前から親戚であった彦根の町人宮田四郎兵衛にあてて、一通の書状をしたためました（写真はその一部）。長さ2・5メートルの長文の書状でした。新作は北海道の松前に出店を置き、漁業経営と、上方との交易を手がけていました。江戸時代、柳川村とその隣の薩摩村（同薩摩町）からは、新作のような松前交易商人が多く出ました。

この書状では最初に、新作が5月6日に敦賀を出帆、日本海を北上し、10日に深浦（現・青森県深浦町）に入港、その後、北海道に無事到着したことをしらせています。続いて、幕府目付の黒

川盛泰が函館を訪れ、函館奉行所に開墾政策の見込みを尋ね、今後は漁業を主にするように指示し江戸に帰った、との噂を記し、幕府の北海道開墾政策が撤回されればありがたいと述べています。そして江戸に戻った黒川に関する情報が、江戸にいる倅（せがれ）新介から彦根へ送られてくれば、敦賀經由の船の早便で知らせてほしいと依頼しています。

当時、新作は漁業請負場の権益をおかされる問題を抱えていました。そのため新介が江戸へおもむき、彦根藩公用人宇津木景福、さらには大老であった井伊直弼を通じて、函館奉行へ権益の保障を願っていました。新作自身、3月まで江戸に滞在していました。新作は、目付黒川が幕府へ報告する内容が、自分の問題に大きく関わると考えていました。

ところで、右に紹介した書状の内容から、江戸の新介から北海道松前の新作へあてた書状が彦根の宮田氏へ届けられ、さらに敦賀を経て、松前へ伝えられるという方法がとられていること

がわかります。また、逆に松前の新作から江戸の新介へあてた書状も彦根を経由し、江戸まで届けられました。

このような書状による連絡の取り方が可能となったのは、道路や宿場などの整備、飛脚・廻船などの運搬・通信の制度が江戸時代に発達し、人々の活動を支えたためです。この仕組みは、幕府・大名などの領主による制度に、民間の商業活動の全国的な広がりが加わり形作られたものでした。新作が利用した連絡ル、とも日本海の西廻り航路の一部です。新作のような商人をはじめとする当時の人々の、情報を求め、また送ろうとする並々ならぬ姿勢が、通信の仕組みを発展させ、機能させていた原動力であったと考えられます。

以上のように見てくると、この書状は、江戸時代に生きた人々の心持ちや生き様を私たちに伝えると同時に、それ自体が通信制度の発達や、社会の成熟をも表現するものなのです。

（彦根城博物館学芸員 渡辺恒一）

※写真の古文書は、彦根城博物館常設展示「松前商人と彦根藩」で8月21日（水）から9月16日（月）まで展示します。

田村新作が北海道松前から出した書状（四十九町代官家文書 彦根城博物館蔵）

